

「回顧・86年」より抜粋

# 一本の道

青岳 本木 康喜



瑞色鮮

「回顧・86年」より抜粋

# 一本の道

青岳 本木 康喜

あかあかと一本の道 とほりたり

たまきはる わが命なりけり

斎藤茂吉の歌

この歌は、明治15年山形県に生まれた医師、歌人でもある斎藤茂吉の歌である。

ある秋の夕暮れ 代々木の原を見渡し、夕日に映えた あかあかとした一本の道が通っている情景を眺め、詠んだ歌である。茂吉は「この一本の道こそ 私の命だ!」と、自分に言い聞かせている。大正2年、茂吉が師と仰いだ伊藤左千夫が亡くなった。その後

「これからは、自分が独立して歩まねばならない。」という決意をこの歌に込めたという。

茂吉同様、ひたすら一本の道を歩んできた私には、この歌が「我が人生の応援歌」として、身近に響いてくるのである。

## I、慈眼童心を旗印に40年、師魂を磨く

### 1、私が、教職を決意したとき

私が教職へのスタートを強く意識したのは、昭和20年8月15日、群馬県榛名山中腹の前橋予備士官学校で終戦を迎えた時以来のことである。

その数日前、榛名山の奥深くに避難していた私達は米軍の無差別爆弾攻撃によって山麓の町々が累々と燃え広がる恐ろしい光景を目の当たりにした。

それから間もなく、敗戦受諾の玉音放送を聞き、兵士一同、茫然自失の状態であった。これから後、「日本の子ども達は、敗戦の痛手からみんな暗い顔になってしまうのではないか。」と真剣に考えたものである。

祖国存亡の危機感から、学業途中で軍隊を志願し、入隊した私は、終戦と共に再び学生に復帰したが、そこでもまた廃墟と化した東京の街と、さまよい歩く子どもの姿を目にした。この時「日本の復興は、教育以外にはない。」と強く思うようになった。

昭和20年9月30日、希望に燃え国分寺第二小学校に着任した。何か指導のヒントをつかもうと書店に立ち寄り、真っ先に、手にした本は「デンマークの復興を見よ」であった。「ホテルの一室でふと目を覚ますと、メイドさん達の美しい歌声が聞こえてきた。それはなんと賛美歌であった。」との記事に目が止まった。

一日を賛美歌でスタートするデンマーク人に、私は感動したのである。「これだ、これでいこう!」と心に決めた。

そこで、教室には「ミレーの、晩鐘の絵」を飾り、「音楽に始まり、音楽に終わる学級経営」にのめり込んでいった。それは、懐かしい思い出である。

## 2、私の教育信条

私の教育信条、それは「慈眼童心」である。

それを、やさしく表現すれば、次の芭蕉の句

「よくみれば ならずな花咲く 垣根かな」 になる。

・ナズナの花は、バラの花のようにパッとしない。淡く小さな花である。しかし、ナズナは、ナズナなりに精一杯の力で咲いている。その人なりでよい。「その人なりに、精一杯の力で咲く姿」を、私は本当に美しいと思う。

・また、ウォーズワースの詩に「私の心は、虹を見ると躍る。大人になった今もそうだ。そうでなければ死んでしまいたい。」とあるが、全く同感である。

・かつて私は、吉川英治記念館で、彼の信条「我以外皆我師」という色紙を手に入れた。子どもは元来、この語句のように、いつでもどこからでも学ぶ心を持っていると信じている。

この「自分なりに精一杯の力を尽くす心」「感動する心」「いつでもどこからでも学ぶ心」これこそ 童心 であり、私は、何歳になってもこの心を持ち続けたい。

また、垣根の陰で淡いながらも懸命に咲くナズナの美しさを発見した「芭蕉の目」これこそ、「教師の目」でなければならぬ。また、この温かく鋭い目で、子供のよさを発見し、励ましていくことこそ教師の役目であると自覚した。これが、私なりの解釈 慈眼 である。

「慈眼童心」を貫く。これが、師魂を磨き歩む私の「一本の道」である。

## 3、勤務した8小学校の概略

### ① 国分寺市立国分寺第二小学校 4年8ヶ月間

原島・名城・大貫校長

情熱に燃え着任した。自然観察・自由研究・ディスカッション・分団学習等の教育活動や欧米の教育について研修を深め、質の高い授業の創造に努めた。

ここでは、都の指導部の全面支持・協力を頂き、指導力を磨くことが出来た。NHK 全国放送「夏休みの過ごし方、討論会」にも出演した。教師として順風満帆の船出であった。

### ② 新宿区立戸塚第一小学校（理科主任） 2年11ヶ月間

戸田・松野校長

各学年5学級の大規模校。学年主任の人材が揃い自由な雰囲気のある学校であった。私は、前任校での反省から「基礎基本の学力・養成」に力を注いだ。また夜間は、早稲田大学に通い勉強を続けた。教師としての基礎固めが出来たと思う。

③ 杉並区立馬橋小学校 (理科主任) 10年間 塩原・古川校長

研修意欲に燃えた教師集団と、協力を惜しまない地域社会に恵まれ、明るく楽しい学校であった。全校集会・全校音楽に力点が置かれ、区研究指定校となった。私は、更に得意分野である理科教育にも力を入れた。杉教研主催の科学教室や、夏期休業中の理科研究部の仕事にも積極的に参加する等、活動領域を広げた。

④ 杉並区立杉並第六小学校 (生活指導主任・教務主任) 4年間 加藤・長尾校長

山の油絵を得意とする加藤校長と人間味豊かな滝沢教頭の下、和気藹々の雰囲気のある学校であった。生活指導主任・教務主任としての勤めを果たすべく努力した。また杉教研事業部員として秋川林間学校の設営に当たった。更には、欧州教育事情視察団の一員に加えて頂いたことが強く印象に残っている。

⑤ 杉並区立高井戸第四小学校 (教務主任・研究推進委員長) 6年間 松本校長

学校をよくしようとする意欲抜群の松本校長の下で、教務主任として、また区研究指定校・研究推進委員長として「教育機器を取り入れた質の高い授業」をめざし、校長の意を汲みながら、全職員の協力を得て懸命に働いた。研究指定校としての成果発表を無事成し遂げほっとしたものである。厳しい校長であったが、最終的には私に対する温かいねぎらいの言葉と共に管理職への推薦をして頂いた。

⑥ 杉並区立浜田山小学校 (教頭) 3年間 鈴木・小倉校長

鈴木校長は神経細やかで、教頭職の私を特別大事にして頂き、学校運営の一切を任せられた。私はその信頼に応えるべく、職員の和を大切に、士気高揚に努めた。また、東京都の会計監査校として、区内ただ一校の指定を受け緊張したものであったが、それも無事通過することが出来た。教職員一丸となり協力して頂いた。区教委からは「世直しの本木」と称された。

⑦ 杉並区立桃井第四小学校 (教頭) 4年間 小嶋・瀬山校長

浜田山教頭3年が経過した時、区内4校の校長から「うちに来てほしい」と誘いを受けたが、最終的に桃四小を選んだ。小嶋校長は、柔軟思考の方で体育中心の学校運営に力を入れていた。地域の協力も万全で、和気藹々の学校であった。瀬山校長になって1年目の時、都教委より八王子市立檜原小の校長を命ぜられた。

⑧ 八王子市立檜原小学校 (校長) 4年間

以前から「大変な学校」と称されていたが、教職員は一致団結、汚名を返上した。私は「子どもと教師が俱学俱修、共に自分を一步高めようとする厳粛性のある校風作り」を目標に「教育環境の整備」と「親心に応える親心の教育・ヤッテミセ、言ッテ聞カセテ、ヤラセテ見セテ、褒メテ育テル指導」を推進した。

## 4、学校経営の基本方針を確立

### 檜原小学校・経営の基本方針

八王子市立檜原小学校長 本木 康喜

檜原小の校章にある2枚の檜の葉には、「学校によき校風を樹立し育てる団結と愛情の手を表す。」という気持ちが込められているという。創立5年目を迎えた今日、もう一度、その精神を振り返り、心を新たに、よい校風を守り育て、一層発展させたいとの思いを心に秘め、私の経営方針を述べる。

まず、その前提として、学校とは何か、教育の本質はどこにあるかをふまえたい。

- 1、学校は、子どもを大切に、父母の信託に応える公教育を実施する場である。また、子どもが子ども自身として生き、自己実現をはかる共同の場である。
- 2、学校での教育は、教材を媒体として教師と子どもが人格をぶつけ合うところに成り立つ。

私は、この二つの原則をふまえ、次の5本柱を大切にしていきたい。

#### 1 親心にこたえる親心の教育を

ア、つねに、子どもと共にある教師でありたい。

教育は、口先だけで出来るものではない。「ヤッテ見セ、言ッテ聞カセテ、ヤラセテ見セテ、ホメテヤラネバ、人ハ育タズ。」の言葉通り、教育には手しおにかける愛情が大切である。

また、教師が子どもと共に自分を一步高めようとする厳肅性を学校中にあふれさせなければ、子どもの実践力は身につかない。私はこの**俱学俱修**の中に、真の教育があると信じている。このような雰囲気の中で、子どもが多面的に理解され、温かい言葉をかけられ、はだにふれた指導がされたとき子どもは、喜びを感じ、伸びていくのである。

イ、つねに、公平を心掛ける教師でありたい。

ちょっとした教師の不注意が、誤解を生み子どもの心を傷つける。子ども達は、いろいろな生育歴を持ち個性も多彩である。どの子どもにも、きめ細かい心遣いの指導を心掛けたいものである。そこにこそ、子どもの喜びがあり、親は感謝し教師を信頼する。

ウ、子どもを信頼し、「待つ心を持った教師」でありたい。

学級会でよいことを言った子が、廊下を走り、遠足で、紙くずを散らす。そのようなとき、教育のむなしさを感じることさえある。しかし、決してあきらめてはならない。「**子どもは成長過程にあるのだ。**」と認識し、根気よく心情に訴え、意欲を高め、判断力を養い、実践力を蓄えさせたい。今度こそは！と自覚していくことを期待して「**待つ心**」を、身につけたい。

## 2 教師の専門職性を高める研修を

### ア、自己改造をはかる。

教育の仕事は、人間の心身の発達に関するきわめて複雑高度な問題を取り扱うもので、医師より難しいと考えている。「哲学的理念と科学的な方法の総合」という本質的な難しさを持っているからである。それだけに、教師には研修は欠かせない。吉川英治は、「我以外皆我師」という信条をもって研鑽されたそうであるが、我々もそれを範とし、自己を磨き、自己改造に励みたいものである。

### イ、教材研究を組織的に。

事前研究をよくして子どもの前に立ったとき子どもは授業に乗ってくる。「わかった」と喜んでくれる。自信をもって子どもの前に立つためには、子どもの実態把握と教材研究はどうしても必要である。また、学年会や教科研究部等の組織を背中に背負って子どもの前に立つことが大切である。組織の中で教師の専門性が磨かれるような職場にしたいものである。

### ウ、よい授業の創造をめざして。

よい授業は、教授と学習を調和させるところに成り立つものと考え。知識注入の教授に偏した授業に、現在批判が集中されているが、確かに、一人一人の学習者の立場を忘れた授業では、本校がねらっている「進んで学ぶ学習態度」は育たない。また逆に、子どもを買いかぶり訓練や反復練習を忘れた教育では、基礎基本は定着しない。豊かな人間性育成の教育は、その接点に求められる。

## 3 学校の教育目標達成の状況を絶えず追求しては、方策に創意工夫を

### ア、学年ごとに具体目標を持って

#### 檜原小・教育目標

- ・明るく健康な子ども
- ・よく考え、進んで学び、行動する子ども
- ・豊かな心を持ち、思いやりのある子ども

学校での教育活動は、すべてこの学校の教育目標達成のための活動である。

だからこの教育目標を大事にしたい。

しかし、教育の実践段階では、まだ抽象的である。

各学年ごとにこれを具体化し、方策をもって臨まなければ、効果は期待出来ない。学年ごとに経営案を作って目標達成に努めてほしい。そしてその視点から子どもの変容を追求し、方策を工夫し、日々新たな教育を展開していくことが目標達成への道である。

#### イ、全教師の経営参加と組織的活動を通して。

学校の教育は、組織的、継続的、計画的な営みに特徴がある。どんな細かいことでも全体に図らなければ実施できないということでは効果は上がらない。基本的なことについては全体への理解を図ることが当然であるが、具体的活動は組織ごとに、また個人としてもよいアイデアを興し、計画・実施・評価をるところまで責任をもって当たってほしい。個の意見が組織を通して全体に反映されるように望む。

#### 4 教師と子どもで、手作りの教育環境を

「環境が人を作る」という。環境は、教師の指導に勝るとも劣らない。美しい学校・楽しい学校をめざし心的にも物的にも生き生きとした環境作りに努たい。校庭も、教室・廊下・階段・昇降口など屋内も、子どもの生き生きした活動や教職員の細かい配慮が見える温かい学校でありたい。ここでもアイデアを集め、教師と子どもの手作りの環境を整えていきたい。本校は、周囲の自然環境に特に恵まれている。これをどう教育活動に生かすかは、本校の課題といえよう。

#### 5 地域・家庭との連携を大切に

一人の子どもは、学校だけで育つものではない。また家庭だけで育つものでもない。学校・家庭・地域との協力・相互補完こそ、健全な児童育成の基本である。いま、非行傾向をもった児童生徒が増加しそれが社会問題化している。この際、特にその関係の必要を痛感する。

ア、情報を交換し合って、相互に児童理解を深めること。

イ、学校教育に対する啓蒙を図り、学校教育の効果を高めること。

ウ、家庭や地域の教育力が強化されるように積極的に働きかけること。等の活動を通して地域全体が子ども達にとって楽しい場となるよう努めたい。

以上、5本の柱を、私の経営の基本方針として述べてきたが、どれ一つをとっても、本校の大きな課題である。

※ 「よい校風の学校とは、子どもも教師も、課題解決の能力を持ち、子どもと教師が、共に自己を一步高めようとする厳肅性のあふれた学校である。」と考えている。長期的な展望をもって、これらの課題を解決し、子どもや地域から、より一層信頼される学校を作りたいと念じている。

以上

## 5、 檜原小の創立20周年記念誌によせて

### 檜原小回想録の一節から

第3代校長 本木 康喜

昭和56年4月、檜原小に着任以来、私の起床は、午前5時となった。そして、5時45分から、NHKの「人生読本」を聞くことが習慣となった。

さまざまな人生の達人の話は、今の檜原小の在り方を、いろいろな視点から探るのに役立った。今日一日の想を練っては、「よし！」と、家を出たものである。

電車・バスの中は、さまざまな思いが錯綜する。

終戦直後、東京の焼け野に立ち、茫然としたこと。これからの子どもたちの顔からは笑顔が消えてしまうのではないかと、真剣に思い「戦後の復興は、教育にあり。」と信じ、この道に入ったこと。そして、「檜原小は、私にとって最後の締めくくりの学校である。しっかりしなければ。」という思い、等々、浮かんでは消える。

2階の校長室からの眺めはすばらしい。初春から夏にかけて、木々の緑は、刻々と変化する。ウグイスのさえずり、けたたましいコジュケイの声、そして、アカゲラの木をつつく音など、今も耳に残る。

環境が、子ども達に与える影響は大きい。「非行は、汚い学校から生まれる。」といわれるが、真理であろう。私は、先ず、校長室の整備から始めることにした。次に、応接室から各教室、更には、校庭・花壇へと発展させたいと願い、計画し、実践した。暇を作っては、樹木の名札かけ、踏み固められた芝生に鍬をふるい汗を流し、緑をよみがえらせた。子ども達が、球根を植えやすいように花壇を耕した。

子ども達が、「先生、何しているの？」と話しかけてくる。中には、手伝ってくれる子どももあった。心の交流は、こんなところから生まれる。それが、私にとって、一番の楽しみであった。

創立20周年、今後、ますますの発展を祈念しています。

以上

## Ⅱ、退職後は、墨池の道をまっしぐら

「自分のやりたいことを存分やれば、人は強くなる。」

宮本武蔵

「若さとは、岐路に立ったときあえて苦難の道を選ぶ気概である。」

瀬戸内寂聴

昭和 60 年 3 月 31 日、都公立小学校長退職後は上記の言葉通り、私のやりたい道をまっしぐらに走りぬけたい気分であった。そこで、

- ・ 平日は、市教育研究所に勤務（教育機器専門員として）（3年間）
- ・ 日曜日は、書道大学へ（日本書道美術館）（2年間）
- ・ 夜間は、謙慎書道会幹事 中野白呂氏に師事（6年間）

という三つ叉懸けた多忙な日々を送った。

○ 研究所では、教育機器の扱い方を市教職員に指導する一方、校長時代の職務の延長で、新採用教員の教育係も務め、指導主事と行動を共にした。

○ 書道大学は、生徒数約 80 名、その出身は、全国にまたがり、稽古当日には、飛行機や新幹線で駆けつける方、ホテルに宿泊して通う方等、大変熱心な人達ばかりで、その大半は地方で書道塾を開いているとのことであった。

そのような熱心な方々の中で、私は、クラスの級長を務めさせて頂いた。

○ 中野白呂氏のもとでは、各種書法展に入選・入賞すべく猛稽古を重ねた。

この三つ叉懸けた多忙な修行が無事終了した頃、その締めくくりとして、

平成 4 年、「陶器と書の兄弟展」を開催した。その際は多くの先輩・同僚・教え子達のご来駕・鑑賞を頂き、盛会裏に終わることが出来た。

これを出発点にして、深淵な墨池道探索の修行生活に入った。

書の値打ちは、「誰が」「何を」「どのように表現したか」によって決まる。

1、「誰が」・・・「坂本龍馬が或いは野口英世が、書いた書。」というだけで書の値打ちが上がる。書者の生き様が、書の値打ちに反映する。「書は心の表現である」という言葉は、後漢時代の蔡倫の言葉である。心豊かな人にして初めて美しい書を生むことが出来るということは真実であると思う。至らぬ身に鞭打ち、努めて美しいものに接し、心を清らかにして、たくましく生きたいと精進してきた二十数年であった。

2、「何を」・・・私にとって書作の原動力は感動である。

書作の材料選択にあたっては、私は先ず、詩歌作者の伝記を読むことから始める。すると数百年、千年も昔の人でも、ごく身近の人になり、その人となりや生き様に感動を覚えるようになるのである。それから初めて筆を執り、その人の心になってその感動を書に表現するのである。

私は、かつて、中国四川省の峨眉山山頂に立ち、その昔若き李白が、大望を胸に旅立った時の思いを共有して帰国した。その数年後、その思いを、作品にぶつけて「峨眉山月歌」を仕上げた。そして夢破れ溪流に釣り糸を垂れる老境の李白に思いを巡らしつつ、「姑熟溪」の詩を書き上げた。

また、思いやりの塊のような杜甫に感動しつつ 仕上げた作品 「晩出左掖」「野望」そして「春夜喜雨」。

更には、高適・王維・賈至・ 呉鎮・張旭・蘇舜欽・孫逖・劉長卿・高啓・賈島、等の漢詩に惚れ込み、昼夜を問わず、書き続けてきた。

師・中野白呂氏の影響で、上記の如く漢詩中心の作品を手がけてきたが、やがて、「日本人の心を捕らえるものは漢詩よりも和歌が優れている。」と思うようになった。万葉研究家・犬飼 孝の CD を買い込み、その朗詠を楽しんでいるうちに、古代万葉人の人間味豊かな歌に、すっかり引き込まれてしまった。

特に、大友家持には、私と重なる部分のあることを発見し、親しみを感じつつ彼の作品を書き進めたものである。

また、良寛禅師と道元禅師の時代を超えた師弟関係のすばらしさには感動させられた。良寛禅師の辞世の句 「うらをみせ おもてを みせて 散るもみぢ」

更に、道元禅師の歌 「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて涼しかりけり」等、良寛・道元の心を心として、筆を走らせた。

### 3、「どのように表現するか」

表現については、それこそ長年の修行が欠かせない。「書の美の法則」を体得しなければならぬからである。法則をわきまえずに何枚書いても無駄である。

私なりに体得した美の法則は、次のようなことである。

ア、友達関係を念頭に書き進める。

- ・ 互譲の精神を大切にすると同時に、働きかけも忘れないこと。

(偏と旁の関係、前の字と後の字の関係、行と行の関係など)

イ、日本画の余白の美を、書作品にも取り入れる。

- ・ 三角形の余白の美・半円形の余白の美。など

ウ、今にも動き出しそうな前傾姿勢の字を意識して書き進める。

エ、本能、バランス感覚を働かせて書き進める。

- ・ 前の字がバランスを崩したら、すかさず次の字画で支える本能である。
- ・ 紙の白と墨の黒のバランスをとって書き込む。など

サッカーの選手は、激しい動きの中で、相手の選手の心理状態まで冷静に判断してプレーするという。まさに「動中静あり」である。それに対して、書作はまったく逆の動作で、静かな中で筆を走らせながらも、頭の中は、上記の「美の法則」を活発に働かせながら筆を走らせるのであって、まさに「静中動あり」の境地と言えよう。

書の醍醐味は、なんといっても作品完成時の何とも言えぬ喜びにある。

一枚書き上げては掲示、評価・反省・検討を加えては、また書き直す。この過程を百回・二百回と、納得いくまで繰り返した末の完成である。その時、ふと子どもの頃を思い出す。5歳の頃、毎日のように青空高く飛ぶギンヤンマを追いかけた。つがいになり地上に降りてくる、その瞬間をねらって捕らえるのである。それをキャベツ畑でうまく手にした感動は今も忘れない。「心華獨笑の境地」というのであろうか。

「遊戯三昧」という言葉は、子どもが遊びに夢中になる様で、仏教では仏道修行の理想の姿であるという。校長退職後の26年の書一途の修行を通して、同窓や教え子達とのつながりも一層緊密になった。毎年開催される作品展の度に、かつての同僚や同窓、また、教え子達の鑑賞を頂き、その都度、楽しい一時を過ごすことが出来た。これは全く、書のお陰というものである。また、その学習対象は、時間・空間を飛び越え、古代日本人や、中国人の文化研究にも飛び火し、理解が深まったように思う。

思うに、私が、今日このようにあるのは多くの方々のお陰である。

70年前、私が16歳の時であった。柔道初段に合格し、道場に私の名札を掲げることになったが、私は、書に自信がなく、親友田中一君に名札の揮毫を依頼した。彼は、かつて文部大臣賞を取った腕前を持つ人だったからである。数日後、彼は、にじみ止めをほどこした見事な木札を私に手渡してくれた。そのときの感動は忘れることはない。これが、書にあこがれを持ったきっかけであった。

次いで、師範学校本科1年、18歳の時であった。師・斎藤溪石先生に短歌の模範書を書いて頂き、それを下敷きにして何回も何回も稽古を積み重ねた。その1枚を先生に提出したところ「なんだこれは、本木、こんなことをしてはだめだぞ。」と叱られた。私は、納得がいかず、努力してきた経過を説明した。その時、先生は黙ってうなずき10点をくれた。それ以来、私の提出作品には、いつも10点満点がつけられるようになった。想像してみるに、あの時、先生は、私がずるがしこく、先生の範書に署名して提出したと勘違いし、注意されたと思うのである。私は先生が勘違いされるほど、先生とそっくりの字が書けるようになったかと、少し自信をつけた瞬間であった。

49歳のとき、学校の勤め帰りに、吉祥寺駅ビルの書道塾に三ヶ月ほど足を運んだ。師は高田墨山先生である。先生は私の書を見て「よく稽古されていますね。」と褒めて頂いたが、ついで「この線を長くしたのは、どういう意味があるのですか？」と問われハッとし、返答出来なかった。今まで一本一本の線や点の意味など考えて書いたことがなかったからである。これがプロとアマチュアの違いかと思った。それ以来、私の書の勉強法を、「書の美の法則発見」へと大転換させたのである。

上野の美術館に立ち寄った時のことである。そこで、たまたま墨山先生の姿を発見

した。先生は、一作品の前に十数分立ち止まり、必死に手習いをされていたのである。プロの鑑賞法はこうされるのかと、驚きと同時に敬服させられたものである。

高田墨山先生との出会いによって、私は、書芸の道に開眼したのである。

退職後は、小金井書道連盟会長・中野白呂先生に6年間師事した。そして独善にならないように、各種書法展に出品すると共に、墨山先生を見習い、各種書法作品展を鑑賞して歩いた。振り返って見ると、充実した楽しい日々であったと思う。

在職中歩んだ「慈眼童心」師魂を磨く一本道。退職後「心華獨笑の境地」に惹かれて歩んだ一本道。いずれも懐かしい。

「幸福人とは、過去の自分の生涯から、満足だけを記憶している人々であり、不幸人とは、その反対を記憶している人々である。」とは、詩人萩原朔太郎の言葉であるが、私は勿論この幸福人の仲間に入る。それは、私にとって厳しかった冬も、いつしか、総てが楽しい思い出となってしまっているからである。現在、私は86歳、四捨五入すると90歳。90のハードルが目前である。体力の維持が大きな課題になってしまったが、この一本道を立ち止まることなく、ゆっくり歩んでいきたいと思う。

「回顧・86年」より抜粋

## 一本の道

発行・印刷

平成23年6月吉日 小金井市前原町3-34-3

青岳 本木康喜

# 履 歴

青 岳 本 木 康 喜

## 学んだ学校

- 昭和6年4月～12年3月（6年間）・・・・・・・・・・ 西三鷹尋常高等小学校  
昭和12年4月～15年3月（3年間）・・・・・・・・・・ 日本大学第二普通部  
昭和15年4月1日～20年9月20日・・・・・・・・・・ 東京第一師範学校（青山師範学校）  
※一師在学中、軍隊志願・20年5月15日～8月15日 前橋予備士官学校（特別甲種幹部候補生）  
昭和25年4月～27年3月（2年間）・・・・・・・・・・ 早稲田大学第二文学部（教育学専修）

## 教 職 歴

- 昭和20年9月30日・・・・・・・・東京国分寺市国分寺第二小学校  
昭和26年5月1日・・・・・・・・東京都新宿区立戸塚第一小学校  
昭和28年4月1日・・・・・・・・東京都杉並区立馬橋小学校  
昭和38年4月1日・・・・・・・・東京都杉並区立杉並第六小学校（生活指導主任）  
昭和38年7月1日・・・・・・・・杉並区林間学校・本部員委嘱  
昭和39年5月5日・・・・・・・・杉並区教育研究会・事業部員委嘱  
昭和39年6月30日・・・・・・・・学校開放運営協議会・委員委嘱  
昭和42年2月19日・・・・・・・・東京都ヨーロッパ教育事情視察団参加  
昭和45年4月1日・・・・・・・・東京都杉並区立高井戸第四小学校（教務主任、研究推進委員長）  
昭和49年4月1日・・・・・・・・東京都杉並区立浜田山小学校（教 頭）  
昭和50年9月19日・・・・・・・・永年勤続者感謝要項による・感謝状授与（東京都知事）  
昭和50年12月・・・・・・・・都・教職員互助会より・永年勤続感謝状授与  
昭和52年4月1日・・・・・・・・東京都杉並区立桃井第四小学校（教 頭）  
昭和56年4月1日・・・・・・・・東京都八王子市立檜原小学校（校 長）（校長会・調査部長）  
昭和58年5月10日・・・・・・・・東京都教育会理事委嘱  
昭和58年9月25日・・・・・・・・昭和59年度公立学校教員採用候補者選考委員委嘱  
昭和60年3月31日・・・・・・・・東京都公立学校長定年退職

## 退職後の職歴と賞

- 昭和60年4月1日（3年間）・東京都八王子市教育研究所・教育工学専門員、委嘱  
昭和60年4月18日・・・・・・・・八王子市教育委員会より・表彰状授与  
昭和60年5月15日・・・・・・・・全国連合小学校校長会長会より・感謝状授与  
昭和60年5月15日・・・・・・・・東京都公立小学校校長会より・感謝状授与  
昭和60年5月25日・・・・・・・・八王子市公立小学校PTA連合会より・感謝状授与  
昭和60年5月30日・・・・・・・・東京都教育委員会より・感謝状授与（学校教育推進に寄与）  
昭和63年10月1日・・・・・・・・八王子市長より・感謝状授与（教育行政進展に寄与）

## 書 歴

- 昭和15年～20年・・・斉藤溪石先生より書の手ほどき（東京第一師範学校にて）
- 昭和56年・・・日本書道美術館・参与
- 昭和60年～（6年間）・・・中野白呂先生に師事
- 昭和61年～（2年間）・・・書道大学（小山天舟・野口魯齋・尾上兼英・今関脩竹・野口白汀・伊藤参州・宇野精一・浅見錦龍・中村閑葉・城所湖舟・藤原宏・諸先生方）に学ぶ
- 昭和61年・・・謙慎書法展（6年間出品・毎年入選）（平成元年・褒賞受賞）
- 平成61年～・・・小金井市書道連盟役員
- 平成2年・・・第7回・読売書法展出品・入選
- 平成4年・・・「陶器と書・兄弟展」 書作品集「遊戯三昧」発行
- 平成9年・・・日本書道美術館・「館展無鑑査」認定
- 平成9年・・・日本教育書道連盟・「教授」認定
- 平成9年以降、毎年・・・日本書道美術館・館展に出品
- 平成11年以降、毎年・・・退職校長会小金井支部作品展に出品
- 平成11年・・・第26回日本書道美術館・館展（無鑑査、臨書の部・準特選）
- 平成12年・・・第27回日本書道美術館・館展（無鑑査、創作と臨書の部、準特選）
- 平成12年・・・日中書法交流展出品（北京故宫博物院にて）
- 平成13年・・・日中書法交流展出品（四川省成都美術館にて）
- 平成14年・・・日中国交30周年記念、書法交流展出品（浙江省西湖美術館にて）
- 平成14年・・・書の聖地、中国蘭亭に日中友好記念碑建立「青岳の号、刻される」
- 平成16年・・・日中書法交流展出品（天津博物館にて）
- 平成17年・・・書作品集「書禅一如」発行
- 平成20年・・・日本蘭亭会、評議員
- 平成21年・・・日中書法交流展出品（東京都立産業貿易センターにて）
- 平成22年・・・書作品集「一瞬の美、上・中・下巻」発行
- 平成22年・・・日本蘭亭会、名誉会員
- 平成23年・・・日中書法交流展出品（黒竜江省ハルピン市禹舜美術館にて）

平成23年6月1日

小金井市前原町3-34-3

青岳 本木 康喜